～キャリアの軌跡～

第2回
２００９年　１月２１日
長崎大学医学部・歯学部附属病院
医師育成キャリア支援室　発行

Career という単語は面白い。経歴、履歴という意味。生活手段としての（特に専門的な）職業。その職業での成功や出世の意味。発展するという意味。
At full career 全速力で！動詞では、疾走する、突進する。ここでインタビューをする人達は、すでに完成したキャリアを持っている人たちではない。
今、走り続けている人たち、全速力で。今からスタートラインに立つあなたのために（医学生や研修医の皆さん）、僕が聞いてみた、キャリアの軌跡を。

長崎大学医歯薬学総合研究科
放射線医療科学専攻　放射線障害医療学講座　放射線疫学
高村　昇　先生

（インタビュアー＆文　医師育成キャリア支援室　浜田久之）

浜田：こんにちは、今日は第 2 回キャリアの軌跡ということで高村先生にお話を聞きたいと思います。簡単に先生の略歴を教えてください。

高村：こんにちは。私は、平成 5 年に長崎大学を卒業しまして、第一内科で研修医として働き、原研の大学院に入り、助手となり、その後WHO（世界保健機関）で仕事をしました。長崎へもどり衛生学で講師、公衆衛生で准教授を務めさせていただき、4 月より放射線疫学（原研疫学）の教授となりました。

学生のころ漠然と考えたことを実現してゆく

浜田：学生のころから基礎医学に進もうと考えていたのですか？

高村：いいえ、将来進もうとは思っておらず、一度基礎医学の勉強をしてみたいと思っていました。学生の頃は疫学という言葉さえあまりよく理解していませんでした。ただ、患者さんを見ながらその集団の特性等をみたいと漠然と思っていました。僕が卒業する頃、遺伝子診断というものが出だしたころで、臨床データと遺伝子診断と組み合わせた何かができないかなあ～と思っていました。今の言葉で言うと分子疫学なのかもしれませんが、そういうことを学生の頃から漠然と考えていました。

浜田：それは、授業がきっかけなのですか？

高村：そうですね、授業もきっかけですね。また熱帯研究所の先生方の仕事、例えば外国に行って、たくさんのサンプルを取ってきて、それを研究するというスタイルは面白いなあ～と思っていました。

浜田：その頃は、臨床研修は義務化ではありませんでしたが、なぜ、臨床研修をやろうと思ったのですか？

高村：それは、やるのが当たり前と思っていました。いきなり基礎に行くより、内科系志向でしたから。まずは、臨床と思いました。

浜田：なるほど。今振り返ってみると大学の研修はどうでしたか？最近は、大学の研修は雑用が多いということで、学生には人気がないのですが。

高村：私が入った時、同期入局はたった 7 名でした。当時は、毎年第一内科へは 15～16 名入るのが当たり前だったので、とても少なかったですね。第一内科のベッド数が 65 床位あったのかなあ。ですから、一人当たりの負担は重くなるし、いわゆる雑用はとても多かったですね。でも、それが辛かったとかはあまり思いませんでしたね。少ない研修医が団結してまとまっていましたし、指導医が本当によかった。オーベン（指導医）、医局長の先生たちがよかったですね。当時は、研修プログラムなんてなかった訳ですが、基本的な病態生理などをきちんと教えてくれましたね。だから、苦痛などはあまり感じませんでした。

研修医の時の仕事の仕方が今も役に立っている

浜田：それでは、先生は現在基礎にいらっしゃいますが、研修医の時の仕事や仕事の仕方が役に立っていることが今ありますか？

高村：例えば今、私自身もいろんな仕事を同時に走らせている訳ですが、この仕事のスタイルは研修医の時の仕事の仕方に似ているんですよ。一人の患者さんを診ると同時に他の患者さんを診ますよね。診断や検査・治療はもちろん別々に進行するわけです。こっちの患者さんばかり診ているわけにはいかないですよね。この患者さんは検査をこうする、別の患者さんは治療に入る、あの患者さんは退院させる・・・・同時にいろんな事を考え、やっていくんですね。そういう仕事の仕方は、基本的な部分で今の仕事にとても役に立っていますね。

浜田：それは、局面局面で、仕事にプライオリティー・優先順位をつけるということですか？

高村：確かに、そうですね。

浜田：それでは、その後人生において、優先順位をつけて仕事をやってきたとか。

高村：優先順位・・・ではないと思いますね。私は、先ほど略歴でも言いましたが、原研、衛生学、公衆衛生と、いくつかの組織を経験しました。組織を移るときに、自分が行くことによりその組織がどうなるか、仕事がどうなるかをまず考えますね。自分が行くことにより組織が良くなるだろうとか、仕事が広がるだろうと考えた時には、行くと判断しましたね。

浜田：それは、自分が持っている特徴的な何かを人に与えられるとか、自分の武器が人に役に立つということでしょうか？

高村：う～ん、そこまで大げさなことではないと思います。たとえば自分の今までやってきたことが、その部署の何かを補えるとか、役に立つかなあと思えれば行ったということですね。

浜田：なるほど。ある意味北米的なキャリアアップに似てますよね。“組織を移るたびに、キャリアをあげて、給与が上がると、地位が上がる”とかありますよね。基本的に移ることはいい事だというコンセプトですよね。その点はどう思われますか？

高村：移ること自体は結果論ですね。自分自身が移りたいということではなく、

いろんな話があり“結果”として移ったということです。移ることにより自分が持っている物が役立つだろうとか、逆に自分の足りない物を補うチャンスがあるだろう、今こういう事が自分に必要だから身に付けておきたいと思う時に移るのではないでしょうか。多分、それは基礎でも臨床でも変わらないと思います。

浜田：確かにそうですね。組織を移るとき、そこの文化とか雰囲気が違うと思いますが、先生はその組織に順応するタイプですか？それとも変えていこうとするタイプですか？

外から見て、組織を、自分を考える

高村：組織といっても同じ長崎大学ですから、そんなに大きく雰囲気や文化が変わることはなかったですね。ただし、組織自体が長崎大学の全体の中でどういう位置にあるかとか、どういう位置づけにあるべきか、組織が何を望まれているとかということを考えたり、新しく所属する組織に知らせたりすることは、外から来た者の重要な仕事ですが、そういう事を考えると、組織の方向性とか研究の内容とか、どういう人材が必要になるかとかが自ずとわかってきます。そういう意味では、“組織を変える”というより“組織を考える”ということですね。

浜田：それはある意味、自分を客観視するとか、組織を客観視するということですよね。それは、やはり海外へ行ったことが影響しているのでしょうか？日本を外から見ますし。

高村：それもあるでしょうし、自分が移ることは、移る組織を外から見ていた人間だったわけです。私は、研修医として臨床から始まり、遺伝子の基礎研究をして、そのあと社会医学へ移ったわけですが、それぞれの分野を常に外から見てきたということになります。だから、おっしゃるとおり、外から見るということは客観視してきたということになるかもしれません。だから、社会医学というものがどういう役割を果たした方がいいかということを外から考えていましたから、実際働いてみる時にそういう視点がとても役に立ちます。
おそらく、それは病院でも同じです。その病院がどういう役目をその地域で果たすべきかは、外から見ると良く分かるかもしれません。そして、それを知ることは重要でしょうね。

浜田：外から物を見ることは、確かに大切ですね。しかし、学生時代とか研修医時代に客観視することは難しいですよね。目の前の試験とか臨床に振り回されて、その日その日で精一杯というか・・・そういう若い時はどうすればいいのでしょうか？

良い指導者を自分で見つける

高村：これは言い尽くされた事ですが、良い指導者を持つということが一番大事です。本当に大事です。良い指導者は、自分を客観的に見て指導してくれますし、自分の気付かない事をアドバイスしてくれる、あるいは導いてくれる。でも、良い指導者に出会わなかったらどうするんだ、ということがありますよね。でも、そうじゃなくて、いい指導者は必ずいるんです。必ず。それを見つけるのは、その人の努力です。私は、たまたま良い指導者、良い上司に恵まれました。しかし、逆に言えば、これはぶっちゃけた話なんですけど、あまりにもすごい指導者にあたると、これは絶対勝てないと思ったりしてへこむ訳です（笑）。

浜田：（笑）

高村：それじゃ、そういう時、どうするかという問題ですが、ひとつはそのようなすごい人をサポートするか、まったく別のところへ行くか、どちらかしかないわけです。そういう時に、自分を客観的に見ることができることが大事になるんですよね。これから先はどういう風に行くか、生きていくかと考えるときに重要になるのは、やっぱり良い指導者です。

浜田：そうですね。ただ、今、大学には良い指導者がいない、と学生や研修医は思っている人が多いので、都会や他の病院へ行ってしまう現状があるのですが・・・

高村：おそらく、大学だけでなく、外にも沢山良い指導者がいるのは事実だと思います。しかし、良い指導者を見つけるのは都会にある病院とか有名病院とか、その人の肩書とかじゃないんです。その先生がどう考えているかとかを自分の目で見ること、ある意味客観視することですね。その指導者が、全部が全部良いところばかりじゃなくて、この人はこの点が優れている、あの人はあの点が優れていると客観視することが大事です。もしかすると、見る側の感受性の部分かもしれませんが、そういう目や感じ方を大切にしてもらいたいです。

状況を打破するためにメッセージを発信する

浜田：最後に、新臨床研修制度で基礎や社会医学に行く人が少なくなっていることが問題となってますが、この点いかがでしょうか？

高村：これは、ひとえに私たち教官の責任が大きいと思います。背景には、医師になる絶対的な数が足りないということがありますが、私たちがもっと大きな魅力的な旗を建てるべきだと思います。
もちろん、長崎の若い人に伝えなければなりませんが、全国の若い人に届くようなメッセージを出すべきだと思います。長崎大学の基礎や社会医学に来る人が少ないなら、逆転の発想で、全国あるいは海外からも人が来るようなメッセージを出さないと、この状況は打破できないと思います。定員を増やすのも大事ですけど、それに加えていかに私たちがメッセージを出すかが非常に、大事になってくると思います。

浜田：強いメッセージありがとうございます！最後に、先生の教室に学生や研修医がいつでも遊びに来ていいですか？

高村：もちろんです。仕事や勉強の話もしますが、それ以外に、いろんな話をしたいですね！ぜひ、遊びに来てください！

インタビューを終えて

来年の春に東京からひとりの医師が、高村先生のところで勉強をはじめるらしい。なるほど、全国へ、世界へ向けてメッセージを発することは大事だ！

キャリア支援室のホームページが立ち上がりました！！

URL：http://www.mh.nagasaki-u.ac.jp/career/index.html

長崎大学　医師育成キャリア支援室　検索

♪上記キーワードで検索ください♪

キャリア支援室行事予定

2009/3/9（月）
平成２０年度県内臨床研修病院合同説明会@長崎大学医学部（良順会館）
※希望者は臨床教育・研修センターへ申し込み下さい。
2009/3/20（金・祝）
研修医のための臨床研修指定病院合同セミナー@福岡国際会議場

問い合わせ先

長崎大学医学部・歯学部附属病院
医師育成キャリア支援室
TEL→０９５－８１９－７８４７
FAX→０９５－８１９－７８８２
MAIL→career@ml.nagasaki-u.ac.jp
HP→http://www.mh.nagasaki-u.ac.jp/career/index.html